



阿蘇へ帰ってきたとき、なつかしかったなあ、この風呂。

火の国阿蘇の
恵みのブランド

阿蘇
zen
Aso City

明治三十年、灌漑用の穴井戸を掘っていたら、やぐらを建てて数日目のこと、

ほとぼしるように湯が噴き上がった。これが内牧温泉の開湯でした。

現在、宿以外に町湯と呼ばれる

立ち寄り湯（共同湯）がいくつか湯気をあげている。

「やわらかい湯」として愛される七福温泉もそのひとつだ。

組合を作り、輪番で管理を受け持っています。

リーダーである組合長も回り持ち。

林安治さんは、平成二十五年七月現在の組合長です。

浮世風呂と呼ぶのがふさわしいコミュニケーション広場。

いつもの時間にいつもの顔ぶれが集まってきて、ざぶん、ざぶん。

もともとは郵便局員だった林さん、東京都や北九州市で仕事をしており、

民営化の前に退職、阿蘇へのUターンの道を選びました。

「帰ってきたとき、この風呂、ほんとうになつかしかったなあ」

湯上がりのような笑顔で、しみじみ振り返ります。

七福温泉 林 安治

あるがまま、という貴さ。

人と自然が共作する阿蘇。